

なお本稿を草するにあたり、本学鶴久助教授の貴重な助言を得た。記して謝意を表したい。

## 枕草子成立考

小方 隆子

### 序

和歌の時代に、そして多くの物語、日記の誕生した時代に、枕草子は敢えて新しい形をもつて書かれた。作者の好みが偶然にこの形をとらせた。いわば物語、日記の一ヴァリエーションとして、文学史に位置するのではなく、もつと積極的な作者の意識を感じるのには当らないだろうか。

歌を中心にした利那の興味が、もはや利那では済されぬものとなつた時、ある人主内容を描く物語が誕生した。そして日記も又或人生を描いた。だが枕草子は自己を語りながら決して人生そのものを描かない。人生そのものを語らない作者、それを幻滅や内部矛盾とは無縁であつたと片付けるのは酷ではないか。すべての作者が己れの心境を語るわけではないし、語りたくない何かがあつたかも知れない。作者が敢えて新しい形で書こうとした。ここに作者の心

を探り、作者の意図を正しく究明しなくては枕草子の作品全体としての把握は成し得ないのではないかと思う。ここに私は枕草子の形を追求してみたい。

(一)

枕草子の形態に纏わる成立事情は、まず三卷本、伝能因本巻末にある跋文に窺われる。

執筆にあつた態度と場所、不本意ながらの流布の始第が述べられ、これに留意して五十風、岡博士は、元來他見を度外視した無遠慮な随見随想の記録であるとするが、中宮から賜わつた冊子であつてみれば、いつの日か徒然の折に中宮のお目を楽しませることも作者は当然考えたであろうし「人なみなみ」の言葉にも読者を意識した作者の姿がみられると思う。「人やは」を真正面から受けとらなくともいいのではないか。却つて私はそこに筆をおいた作者の謙虚と弁解の交叉する複雑な気持がなした、いわば虚構のようなものを感じる。そして一見謙辞であるかのようなこの文に、何か作者の主張が窺い知れるように思う。従來の文学にないものを意図した作者の秘かな意欲が感じられるように思う。

跋にみる長徳二年、経房が持ち出した原本がどんな内容をもつていたかが解明すれば、作者の形への意識もはつきりすると思われる。

池田博士の類聚的部分であらねばならぬとする説に對し

て、田中博士の元來雜纂であつたとする説がある。(註3)又、秋

山氏は「心一つに……」等は單なる謙辭でなく、この書が雜

(註4)

然たる内容であることを語つてゐると主張され、岡博士は史記の分量と對比させて、最初から歌題の類聚というよう

な簡単な書物を思い立つはずがないと述べられている。が一応の執筆を終つた作者の作品への危ぶみの氣持がひどく謙虚な跋を書かせたのかもしれないし、史記は全卷を写したのでないかもしれない。

ともあれ、原本の形をここに断定するのは幾分の危険を伴おう。私はあの「枕に……」の個所に視点を定めて再び作品の形を考える。この一言に作者の作品への思い——作品への意欲や自誇や願ひ——が込められていると思うからである。

これは「香炉峰の雪は」と問われて、即座に御簾を高々とあげたあの場面を彷彿するような、清少納言のいかにも彼女らしい機智の閃く得意の情景でなければならぬ。そうでなければ中宮の「さばえてよ」の御言葉もあるまい。中宮は彼女の返答を愛でられ、そこに込められた機智と風情を誤たず捉えられた。

「枕」は書こうとする草子の内容を指したのであろう。しかもそこに何らかの典拠があつて、ある詩境を或いは面

白さを生ぜしめてこそ、この主従のやりとりは、王朝の一点描としてめでたいし、枕草子を生む契機となるにふさわしいと思われる。

咄嗟に閃くように「枕に」といつた清少納言は、どのよう

かに「枕」なる形を意識し、どのような創作意欲をそれに託したのだろうか。はたして、清少納言にあつたのは奇抜な形態で新しいものを生もうとする意識だけであつたらうか。

「枕」はおそらく題詞集的なものを意味したのでもあろう。がそれは網羅的なものでない彼女独自の文学を盛つたものであつた。そして中宮の不幸を目前にして「枕に」と答える彼女に私は、何かしみじみした文学意識的なものを感じる。

(一)

枕草子類纂説に反論する諸説がいうところは、一般に分類される各章段群に異質が認められないということである。それでは打聞、日記の文章も題詞を欠くだけで類聚の段と同じ発想、意識になるものであろうか。

類聚段のうち名詞的諸段の大方が題詞と項目の列挙か極く短い文の施されているものである。形容詞的段では、極く一般的な言葉の題詞段(あはれなるもの、はつかしきもの等々)は非常に長い。

がここで注意したいのは短い文章段(同じことなれどもききしかたこひし)である。これらでは作者は項目に何をあげるかよりも、むしろ題詞として何を書くかに心を用いたのであるまいか。

つまり、名詞的段のように、或は形容詞的段の「あはれるもの」のように、題詞をあげてその範囲内で思いをめぐらし、項目をあげ、かつ説明、批評を加えていくのではなくはじめにそこにあげられる項目についての興味があつて、それを類聚的手法で描いたといえないだろうか。

一つの情景、一つの雰囲気、一つの興趣を描きたい心があつてその段が執筆された。それはもはや類聚段というより随想段に近い発想であるように思う。

「山は」「峯は」という段に深い文学がないとはいわない。好悪の感情の中には美しく個性が輝き、連想の糸をたぐれば格別の味わいが生じましょう。けれどそれらは知的興味を中心に生じた感興であつて、もつと深い所にねざす心からの詩とは少々趣きを異にするように思う。

類聚段のうちに随想的なものへの近づきをみる。そうした段は過渡期的位置にあるのではないかと考える。そして日記、随想段に類聚段の手法のなごりをみるのである。

最初の意図は「枕」をつづることであつた。しかし彼女の成長は「枕」的なものからはみ出していつた。類纂か難

纂かの間に私はもつと自然に考えたい。作者ははじめ類聚的なものを考えたけれど、自身の文学の深まり、実りは日記的段、或は一つのことにもつと深く沈潜する随想的段へ発展していつた。「枕」を考え「枕」を中心に心をひそめた清少納言ではあつたが、彼女の文学はついに随想的なものとして結実した。

枕草子の雑多な形に対して今、私は作者の成長を考えることによつて統一をみることはできないかと考えた。類聚的なものと日記的随想的なものとの間に成長を見るならば物語への発展は考えられないか。作者の意図は元来物語とは異質な、物語に発展しようはずのない、全く違うジャンルに属するものであつたらうか。作者にとつてこの形は必然のものであつたらうか。

(三)

清少納言は物語と同じような素材をとりあげながら、ついに物語を書かなかつた。物語の全盛期に於てである。その理由を窪田氏は纏まりのとれない女性であつた故とし、(註5)

清水氏は余りに多様にみえたという。(註6) その言う所は同列に属するの、相反するの。枕草子には美が多様に描かれている。いわば多面的に。けれど統一はある。多様であり独自であるけれど同時に客観的でさえある。清少納言をし

て、纏まりのつきかねる女性であつたと断ずる説に頷きかねるのである。

清少納言は決して自分の苦悩を語らなかつた。不幸を語らないだけでなく、眼前にみた撰閣政治の苛酷さ、権力の隆替に纏わる世のはかなさ、そういつた人生の悲哀、人間の孤愁とはあたかも無縁の人の如く、ただひたすら美を謳歌し、喜々とした己れの姿を写してみせる。これは枕草子の一つの不思議とされてきた。私はこのことは実に枕草子のあの形と隣り合せの問題であると思う。

文学である以上、作者は事実に素材をとつたにしても、その全部を語らなくてよい。多くの周辺の事象から何をとりあげ、何を捨てたか、そこに私達は作者の姿勢をみる。言換えると、作者がある部分に傾かむりをした。そこに却つて私達は作者の心を窺い知り、そこに文学を感じるともいえると思う。

岡博士は清少納言は時間と因果を無視するが故に絵画的機智的である(註7)と述べられるが、私はなぜ彼女が時間的連続を無視しなければならなかつたか。なぜ因果をも撥無しなければならなかつたかを考える。彼女の性格、本質的な志向でもあつたらう。だがここに、彼女の社会的地位と中関白家の落魄を理由にあげることができないだらうか。

物語、日記では或る人生を、自分を、連続の相のもとに見なければならぬ。とすると女房という位置にあつて上

流貴紳と交る。受領階級出身の彼女の何らかの矛盾、何らかの悩みが、当然投影するだらう。それを彼女は許さなかつた。

わびしさの中に往時を回想することによつて、自らの統一を計つた彼女にとつて、その回想記は、はなやかでめでたく輝くような宮延の描写でなければならず、そこに自分があでやかに活躍しなければならぬ。中関白家の悲劇も決して書かれてはならなかつた。彼女の悲しみは亡き中宮の上にあつまるが故に中宮はあくまでも、やんごとなくめでたく描かれねばならなかつたのである。自分の矛盾を追い払う為にも、中宮の不幸をおおう為にも利那の美であることが要求された。そしてその為には物語でなく、日記でもなく、彼女自身の枕草子が書かれたのである。

### 結 語

この小論をもつて私が追求したのは枕草子の形である。作者はなぜかかつてない形式で己れの著作を手がけたのか。枕草子はなぜこういう形をもつて成立したのか。今にしてみればそれは散文文芸の創始でもあり、随筆という全く新しいジャンルの魁でもあろうが千年を隔てた当時に作者をしてそういう形をとらしめた何かを探らうとしたのである。作者の形への意図、意識を把握することはこの作品の本質、価値如何に関るとの確信からこの問題は出発した。

そして今、私はこの作品の成立が自然発生的なものでなく明確な作者の意識のもとにその才が意図されたという私なりの結論を得たように思う。枕草子は「枕」に始つた。そして作者の成長は次第に深い沈潜の思いを育てた。がその成長は元来物語に發展すべきものではなかつた。人生のある部分に傾かむりした作者は利那しか語りえず、そうした作者にとつて枕草子のこの形は必然のものであつたと考える。

川 辺 世 子

## 「明解古語辞典」と「角川古語辞典」との「あ」に於ける比較研究

- 註 1 岡学燈社 『枕草子精読』  
東京 五十風堂
- 註 2 目黒書店 『枕草子に関する論考』  
池田 亀鑑
- 註 3 初音書房 『枕冊子本文の研究』  
田中重太郎
- 註 4 岩波講座 『枕草子』  
秋山 虔
- 註 5 新潮講座 『枕草子研究』  
窪田空穂
- 註 6 解釈と鑑賞 S・34・9 『枕草子の言葉の使い方』  
清水好子
- 註 7 東京堂 『源氏物語の基礎的研究』  
岡 一男

歴史は流れ、我々人類は膨大な過去になつてゐる。その過去には永久不滅であらうところの古典なるものがある。今日古典読解の爲になす辞書の役割は大きい。多くの単語を或る基準に基づいて整理配列された辞書の性格は非常に複雑である。「一つの言葉の中に日本人のふるさがある。二千年の民族の哀歎が築きあげた古典の数々はすべて私達の心のふるさであつた」とは角川古語辞典の編者のことばであるが、私達は世に誇る古典を数多くうけついでいる。古典によつて、その国の文化がわかるといわれるが、まさしく古典は日本の文化の依り所であると思う。古典は現在に至るまで何ものにも打ち砕けることなくその功績を榮々と輝やかしている。そして時代は常に變遷していくにもかゝらず今後ともずっとその偉大さを残すことである。時代がどんなに変わつても常に新しい意味や解釈を提供してくれるところの古典、その古典の解釈になくて